

E.W.クラークのNew-York
Evangelist投稿記事(その3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 刀根, 直樹, 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006815

E. W. クラークの *New-York Evangelist* 投稿記事 (その3)

刀根直樹訳・今野喜和人監修

New-York Evangelist 第2216号 (1872年9月12日)

日本での生活

1872年6月15日 静岡にて

ここ何週間か、ある少年¹が私のもとに身を寄せていた。彼は以前から書生たちの中でも特に明晰で、有望株の一人であった。私が特別その子に目をかけていたのは、彼が孤児だったためである。その父親は先の戦争で幕府方の軍艦を率い、官軍の甲鉄艦と交戦した。はじめのうちは巧みに船を操り、甲鉄艦の度重なる攻撃を辛くも防いでいた。しかしついに敗色濃厚となって長くは持ちこたえられないことを悟ると、彼は悲壯の決意を固め、屈服するよりはむしろ船もろとも命を断つほうを選んだ。彼は船に火をつけるよう命じ、その炎が取り巻くに至ると、自ら「ハリカリ」[腹切り]に及んだのだった。彼の友人の一人と同じく日本海軍にいた人物がわれわれの学校で長く教頭を務めているのだが、子供はその人の養子として引き取られた。その子を私の家に住まわせてやったため、彼は大変感謝していた。

この前の手紙に勝安房氏の写真を入れたが、その勝氏が件の戦いで幕府方の海軍大將を務めた人物だ。勝氏の邸は静岡にあるが、本人は江戸にいることがほとんどである。彼は私の着任に当たって多大の労をはらってくれ、またそれ以来友人として、相談相手として、変わらず交流を続けている。

今回の手紙には、私が関心を持った二人の少女の写真をつけることにしよう。二人は静岡からプライン夫人 (Mary P. Pruyn) の「ホーム²」に送り出された。

¹ 幕臣一色半左衛門の三男で静岡学問所教頭向山黄村の養子となった向山慎吉のことか。

² 米国婦人一致外国伝道協会が横浜に設けたアメリカン・ミッション・ホームを指す。のち横浜共

うち一人は私の友人である中村〔正直〕氏の娘であり、もう一人は木平〔謙一郎〕氏の娘である。木平氏は学校の実務関係を担っているが、彼はいつも私の希望がすべて実現できるよう取り計らってくれる。この木平氏が中村氏と共同して「^{カンパニー}会社」（中村氏がそう呼んでいる）を結成しているが、これは、中村氏自らが著訳した様々な作品の刊行を目的としたものだ³。彼らの作る和本は、文字を硬い木片に彫り付けたものを版にして出来る。造本は巧みであるばかりか、優美でさえある。中村氏の家を欧米の近代的な印刷工が見たら、どう思うだろう。幾重にも積み重ねられた版木の山、そして寡黙ながらも着実に作業を続ける彫り師たちの様子は、むしろ新鮮なものと映るのではないだろうか。木平氏は和本を作る一方、先日横浜に赴いた際、数種の英語用活字を非常に高い値段で購入してきた。そして、日本語の本のみならず、印刷用蒸気機関の設備もなしに、英語の本を印行しようとしているのである。

ともあれ話は少女たちに戻ろう。二人はいい子にしている、幸せそうだ。「ホーム」でうまくやっていってくれれば、と思う。婦人一致伝道協会の「本部」が、今すぐにも横浜に^{ハウス}建物と生活の場^{ホーム}を設けてくれれば、そして、プライン夫人と彼女の献身的な働きに対して幾分かのはっきりした援助をしてさえくれれば、きっと力強い広範な影響力を及ぼすまたとない機会をものにするようになるだろう。また当地における女性の身体的・道徳的地位を著しく向上させる機会をも得ることになるだろう。私の個人的な考えでは、「ホーム」が当初計画していた目標は放棄すべきだと思う。手の届きづらい混血児の救済をするのではなく、「本部」がより高い目標として掲げている、優れたクリスチャン・スクールの建設をこそ行うべきだと思う。江戸内外の官員たちは喜んで娘を入学させることだろう。女子学校は日本で特に必要とされているし、日本人自身が今先頭に立つようにさえなっている。事実、教育ということが、——英語での教育ということも含めて——この国を文明とキリスト教の国へと向上させるための強力な手段になりつつあるのだ。女子教育は日本にとって重要かつ偉大な一歩となるだろう（女性の勉強意欲は男性と変わらないことも多い）。それに、子供を寺の偶像の前に連れて行き、小さな頭を地面につけて拝ませる日本の母親たちの状況が変わらない限り——私はそんな光景を数多く目にしている——子供たちが理想的な環境で育つ見込みはほとんどない。今ここに、キリスト者の女性が

立学園となった。

³ 「同人社」を指すものか。静岡で刊行された中村の訳書『西国立志編』『自由之理』は、いずれも木平謙一郎蔵版とされている。

活動するまたとない絶好の機会があり、この事業（国をキリスト教化に導く最速の方法）が、「異教徒」の政府によって援助され、維持される見込みまでであるのだ。

ここで、最近江戸から届いた手紙の中から得た収穫をご披露しよう。[以下原文では小活字]

「江戸の大火事の際、カラザー氏の家は被害を免れたかのようにだったが、ほどなくして台所のストーブの煙突を取り巻く木材に火の手が回り、バケツも水も小型消火器もない状況で、十分もしないうちに命からがら家の外へと逃げ出した。一時間としないうちに家は倒壊し、灰燼に帰してしまった。敷地内にあった新設の教会兼学校の建物は完全に燃え尽きてしまったが、家の裏側にあった外国人向け教会（米国人と、英国国教会を除く英国人を対象としたもの）に被害はなく、さらに奥にある、新しい建築中のホテルも無事であった。毎週日曜日にカラザー邸で開かれている祈祷会は、どこか別の場所で続けられることになるだろう。」

『南校』についてだが、塗装とガラス施工、補修といった内部工事は素晴らしく仕上がり、花や木があるおかげで、外観も以前の荒廃ぶりから小奇麗で趣のある敷地と校舎とに生まれ変わった。そのうち『ファー・イースト』紙に写真が載るだろう。グリフィス氏は英語学において完璧な理論の講座を受け持っておられ、ハウス氏・ヴィーダー博士とともに上級のクラス三つを担当している。そこは通訳なしのクラスである。バーカーの化学書とドールトンの生理学書を教授に用いている。英語のクラスは現在八つあり、5名の素晴らしいアメリカ人教師が教職についている。ほかに英国人3人、ドイツ人4人、フランス人5人の教授がおり、生徒は全部で500人である。

「中村〔正直〕が先日、天皇にあてた請願書〔泰西人ノ上書ニ擬ス〕を執筆し、日本でのキリスト教解禁を強く求めた。才気あふれる文章で、ブラウン博士の英訳がジャパン・ウィークリー・メール紙に掲載された⁴。「キリスト者で英国国教会員」だという人物が長文の辛らつな反論を試みたが、「キュリオ」⁵氏が詳細に再反論した。論争は1週間にわたって続いた。貿易商連中（外国人）の多くは、宣教師に対してとても根深く激しい反感を抱いており、抵抗に遭っ

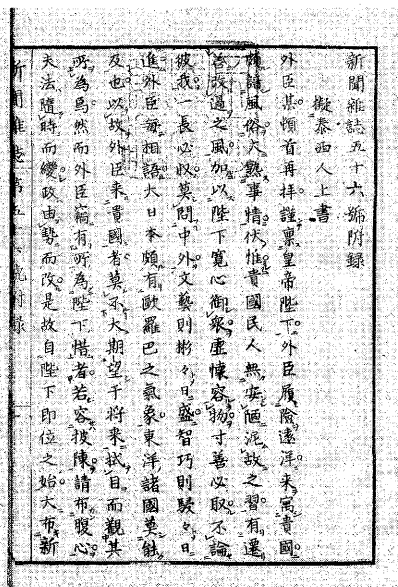
⁴ 中村が自らを外国人に擬して天皇に宛てて執筆したもの。1872(明治5)年5月11日の *Weekly Japan Mail* に掲載され、論争が展開された。のち『新聞雑誌』第56号付録(1872(明治5)年8月)に訓点付きの漢文が掲載された(次頁図版参照)。『新聞雑誌』には「九慮」の文も同時掲載されている。

⁵ Curioはグリフィスの筆名。

てくじけそうになりつつも、事業は着々と進んでいる。——それが神の御業なのだから。各人が持ち場を守っている。バラー氏は人々の輪の中で苦しい仕事を誠実にこなしている。ブラウン博士の誠実さは教育のみならず翻訳の面でも生かされている。ほかの人々も、それぞれが出来ることを行っている。そして神様の記録帳には、G. F. ヴァーベック [フルベッキ] の働きに報いる輝かしい言葉が必ずやその名前の横に書かれるだろう。ヴァーベック氏をよく知る者ならば、その日々の働きのほどがわかるに違いない。ほかのどんなクリスチャンも、彼のような仕事をやる機会を持ち得ないのではないだろうか。」

別の友人はこう書いてきた。[原文では以下さらに小活字]

「先週の日曜日は横浜に行っていた。日本人の関心は相変わらずだ。日曜の午後、バラー氏が女性3人と男性2人に洗礼を施した。土地の教会ではこれまでに合計21人を改宗させている。知っての通り、プライン夫人の家は子供たちでいっぱいだ。横浜の人々が自分たちの手で教会を設けても今のところ官憲の妨害が入っていないこと、そして日本国内で教師の自由が認められていることからして、クリスチャン「迫害」という話は、実際嘘ではないにしても、大いに誇張されたものであるように思う。アメリカの新聞が日本の人民や政府をこぞって悪く書き立てているのを読むと、大いに傷ついた気持ちになる。レポート記事のほとんどがこれっぽっちも正確な検証を行わず、しきりにナガサキ・ガゼット紙の虚言を転載しているが、同紙の編集長はローマカトリック教徒で、捏造記事で知られる人物なのである。クリスチャン (キリシタン) と呼ばれた人たちが、周知の犯罪と国内法に背いて反乱を起こしたかどで逮捕され、投獄されたというのは事実である。しかし、ただその信仰のために罰せられたというのは信じがたい。「残虐な扱い」などと報じている記事のほぼ全てが、よくよく検証すれば信頼に足らぬ話なのである。迫害に関する報道について、私は大いに



疑いを抱いている。それが横浜や江戸や福井や静岡でも行われたとしたら私にも信じられるが、今のところそのような証拠は挙がっていない。」

「今や江戸には100人ほどの外国人がおり、うち三分の二は英語話者である。目下、ヨーロッパ人の居住区に簡易礼拝堂が建設されているところだ。これはユニオン・チャーチになるという。使徒信条にもとづき、宗派や国の違いを越えたものとなる予定である。主キリストを信仰し、英語を話すかもしくは理解する人々全員のための礼拝堂なのだ。」

New-York Evangelist 第2220号 (1872年10月10日)

日本通信

1872年6月16日 静岡にて

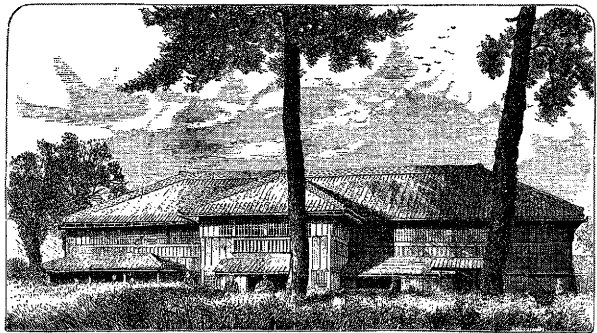
雨降りでは外は陰気だが、我が家の中は晴れやかだ。私が設けた小さなバイブル・クラスはいつにない盛況で、参加者たちは私に、『ローマの信徒への手紙』第8章、『マタイによる福音書』第6章、『詩編』第100編を朗読してくれた。『ローマの信徒への手紙』第8章第15節に触れたとき、生徒たちは特に興味を惹かれた様子だった。大変光栄なことに、生徒たちはほとんど熱狂的と言っていいほどの真面目さで、福音の声に耳を傾けてくれる。彼らは永遠の生を手にしつつあると感じている者の熱心さで、一つ一つ神の真実を自らのものにしていく。

生徒の一人は一度に五十近くもの節を暗唱してみせ、私が求めに応じて解説すると、語句だけでなくその意味するところまで理解できて「とても嬉しい」と言ってくれた。しかし実際、聖書というものは、彼らにとって大変難解なものである。比喩が多く多義的な聖書の言葉を理解しようとすると、解説なしでは到底その意味にまでたどり着けないというのだ。それは決して不思議なことではない。聖書に書かれた語句だけで、そこに込められた思想を正しく、かつ原意に即して理解させられるかという点、それで十分だとは思えないのだ。そのとき助けになるのが、本人の経験や長年の訓練によって一歩ずつその意味を解説していった先人による説明なのである。漢訳聖書の訳文がほとんど荒唐無稽であることが、この確信を特によく体現しているといえよう。生徒たちは漢訳聖書を手にし、事ごとに参照しているが、そこには比喩表現や寓話に込められた霊性というものが全く表現されていない。『オリバー・ツイスト』以下だとすら言える。すべて文字通りの直訳で、そこに表れて然るべき高次の思想や霊

的な思想がつゆほどもみられないのである。

その結果、中村〔正直〕氏が断言するとおり、聖書は漢学者にとって「浅薄で」面白みに欠ける本のうちに列せられ、彼らが根本に置く經書の類、たとえば孔子の述作などと比べて質はるかに劣るとされているのだ。中村は、私が着任するずっと以前に漢訳聖書について学んだというが、そのときは全くもって充足も喜びも見出せなかった。しかし彼は今では聖書研究によるこびを見出し、まるで夜明けの曙光が空へと射し入ってきたかのようなのである。今朝、講義が終わると、彼は「感服しました」と言って、こうしたテーマを学ぶことで今や一条の光が射してくるのを感じることができ、たいへん喜ばしい、と口を極めて語ってくれた。安息日の朝ごとに、彼は私が与えた“Science and the Gospel”『科学と福音』の中から“Christian Moral Science”〔「キリスト教道徳学」〕を一章ずつ勉強している。

近頃ちらほら聞こえてくる噂によれば、府県立学校はすべて休業とされ、教育関係者は当座の間全員江戸に集められるのだという。学校の一部はすでに廃校となっており、私の通訳は何度も、静岡学校が唯一完全な形で存



SCHOOLHOUSE AT SHIDZ-U-O-KA.

立し、江戸の政府によって管理されている学校なのだと言ってきた。事の真偽は不明だが、まちがいなく似たような学校で府県や個人が維持しているものが、何校かはある。実際のところ、静岡学校に関して、江戸で何らかの処遇が決まっているという話はない。ただ、大久保〔一翁〕氏、勝〔海舟〕氏がほのめかすところによると、学校をそっくり江戸に「移設」する案があり、それに関して私の希望を知りたがっているということである。しかし私自身はこの地で自分の仕事と影響力を確固たるものとしていくほうを選びたい。もちろん、ここでの生活は大変孤独なものだし、いらいらさせられることは幾多とあるのだが、しかしそうしたことをすべて置いて、ここには将来役立つであろう有望で広大な可能性の原野が広がっているのだ。これは江戸で望みうるどんな希望にも代えがたく、仮に私がこれを捨ておくようなことがあれば、今早くも実をつけ

始めているものが果たしてどうなるか知れない。ただ一点、私の見通しと計画を危うくしているものとは言えば、多くの友人、優秀な生徒たち、そして優れた助手たちを江戸に呼び寄せて責任ある地位につけようとする政府の方針である。近年各省庁に重要部局が設けられ、刻々と変化する事態に汲々として対応しているが、そこで欲している人材を確保しようとする、静岡において他に見るべき土地は一箇所としてないのだという。それだけでなく、静岡には、先の大君の治世下で権力と最高の地位を有していた「元高官たち」が何百人も居住しているのである。

ミカドの政府は、この上もない慈悲の心と最大限に模範的な態度とでもって、かつての敵を遇している。私を見る限り、彼らの手法は「親切を武器にする」かのようなもので、日本人らしい性質や、人々を素早く丸め込む知略をいかになく発揮している。官職に就くことを欲しない者がよく用いる断り文句は「病気のため」というものだが、この種のぺてんや「仮病」は日本ではごく一般的であり、そんなことは言われた側も当然嘘として受け取るのである。このやり口を見るに、官途に就くことを嫌がっている様子を見せる者ほど、強要されがちだということになるだろう。勝氏は数々の誘いを断った挙句、説き伏せられて「しぶしぶ」海軍大将の職に就いた。

大久保氏の一家はつい先ごろ江戸に移ったが、引っ越すにあたり、懇ろに言伝をし、また贈り物もしてくれた。私は奥様をお訪ねし「サヨウナラ」の挨拶をした。大久保氏は自分のところの坊やについて、常に先生のもとに置いてやってほしい、先生が帰米するときには一緒に連れて行ってほしい、経費はいとわない、と切に望んでおられる。しかし私には何らの保証もできない。

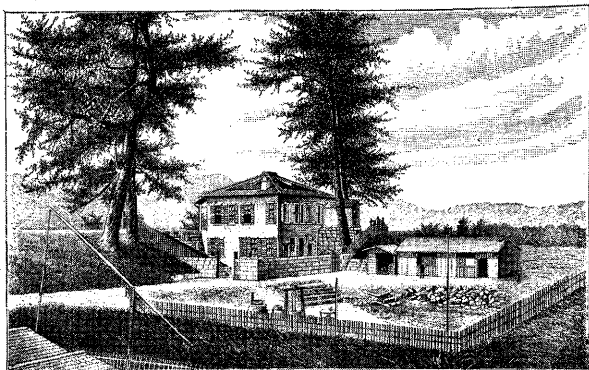
いま私にとっての不安の種は、中村のところにとびたび来る引き抜きの話、すなわち、江戸の「翻訳局」の長に据えようとする話が出ていることである。ブンブショウ〔文部省〕をはじめ、他の役所から彼を誘ってくることもひっきりなしであった。今は大蔵省が狙っており、財政関係の文献や書類の翻訳を任せようとしている。中村自身の希望は、ひっそりどこか静岡に残り、彼の言うところの「霊的な問題」を研究し、私の補助と解説とを頼りに、以前名前を挙げた『天路歷程』(Pilgrim's Progress) やその他の本を翻訳したいというものである。しかし江戸からの圧力は強大で、静岡にいた親友たちも皆江戸に移ってしまった。この上、万が一中村まで誘いに折れて私のもとを去るようなことがあれば、私は仕事の上でも計画の上でも完全に一人ぼっちになってしまい、望みも気力も半減することになるだろう。

日本での家づくり

1872年12月16日 静岡にて

静岡での私の「新居」について何か知りたいということなので、それを報告しよう。家については何かと経緯もあることだし、私にとっては胸踊る話もあるからだ。静岡に来た当初、しばらくの間は古い寺〔蓮永寺〕を住まいにすることで十分満足していた。友人の大久保〔一翁〕と勝〔海舟〕の二人は、その寺ではずいぶん寂しいし、無防備でネズミのはびこるようなところだからと気遣い、新しい家を建ててくれると言ったが、そのときも、差し当たり必要ないからとやんわりお断りしていた。しかし結局、様々な事情を考え合わせると、もはやこの荒れ果てた寺に住み続けるのは無理だと分かってきた。そこで私は勝氏の依頼に応じて新居の建設予定地を見つুকろった⁶。日本人はその位置取りに首をかしげていたが、私の目には、周囲の環境も場の印象も申し分なく映った。その後、私はできる限り注意深く事細かに図面を描き上げ、この図面を基にして、6ヶ月近くもの間、何百人という石工や大工たちが建設にあたった。

粗っぽいながらも苦心して描き上げた設計図が大工の手によって少しずつ実体を伴っていく間、うれしい出来事や初めての経験が、本当に少なからずあった。私自身建築の方面はまるで素人だが、完成するまではずっと家のことで手一杯になっ



THE NEW HOUSE IN THE CASTLE GROUNDS.

ていた。家づくりそのものや敷地の利用計画のみならず、家の内外の事細かな部分まで示さなければならぬのだが、日本人にとってそれらはまるで別世界の品々なのだ。ドア、窓、階段、クローゼット、煙突、それに細かなものまで

⁶ クラーク邸は駿府城内の東北隅、外堀に面した内側にあった(図版参照)。

舍めると何百もの事物を丁寧に図示せねばならず、さらに通訳を介してそれを大工の棟梁に説明するのだが、その通訳も当の品物をほとんど見たことがないのである。それでも大工たちの模倣の技術は、想像をはるかに超えて巧みなものであった。私の説明を受けて彼らが作ってくる小型の模型はほとんど完璧で、修正が必要なことはめったになかった。家の建造物の中でも煙突は特に奇怪なもの映ったようだが、それでも石工たちは素晴らしいものを造りあげた。

実際の施工段階に入ると、まず屋根が一ヶ月ほどで完成したのだが、基礎の最も荷重のかかる部分ができたのは、それから約二ヶ月後のことだった。ここまで読まれて既にお気づきのことと思うが、日本人は、われわれが何か物事について理解している方法と正反対にしなければ、まったく気がすまない性質なのである。[日本家屋では⁷] 常に屋根が最初に完成し、ほかの部分は後から出来るのだ！ 天性の勘で、彼らは常に高いところから造りはじめ、そこから下に向かって作業していくのである。ほかの些細な日々の仕事、たとえば掘削、木挽き、植栽、製材、穿孔、ねじ締めなどでも、日本人は西洋人と正反対のやり方で行う。従来われわれは地球の反対極に住む人々のことを、ハエのように天井に貼り付いて逆さまに歩く奇妙な人たちだと考えてきたが、それはあながち間違いではなかったのだ。

家の各部を建てていく方法を目にしてから、この分では全部煙突の上に出ていくのではないかと、台所も地下貯蔵庫も空に向かって出来るのではないかと思いましたが、彼らにもそれがあまり適切でないというのは分かったようだった。

逆さまの話はこのくらいにして、完成したばかりの我が家とその周辺を簡単にご紹介しよう。

まず前置きとして、この場所にまつわることを説明しておきたい。三百年近く前、大君政治の基礎をつくった人物が巨大な城を築いて居を構えた。その城があったのが、ほかでもない静岡の地である。城は高い城壁と水をたたえた広い堀とに囲まれていた。二重の堀は半マイル以上にわたって周囲を取り囲み、強固な石垣と隣り合う。内堀に囲まれたところには天守閣がそびえ立ち、もう少し小規模の櫓もいくつかあった。長く伸びた築堤の上には松の木が植えられ、その間から射手が敵に向かって矢を放てるようになっている。そのころは若木であった松も、今では大きくどっしりとした老木になった。城の敷地に立つと、

⁷ この部分は原文判読不能のため、同一内容を含むクラーク『日本滞在記』(Life and Adventure in Japan)により補った。

二方面に絶景が広がっている。北側にそびえる「不二の山」は常に印象鮮やかで、雪のロープを華麗にまとい、銀色の雲の笠をかぶった様子はアルプスの頂にも見られない光景である。西側には荒涼とした山々が連なり、谷あいには肥沃で緑豊かな土地が広がっている。

城の周辺はどこまでも広大な田園風景で、稲が波のようにうねっている。さらに東へ数マイル行けば海が広がり、離れていても波音が聞こえる。この閉ざされた神秘の土地で、岸辺に打ち寄せる波はずっと変わらずにあったのだ。静岡では城の周辺に草葺き屋根の家や小屋が無数に点在していて、住人たちは封建領主である初代の^{スイクン}大君に絶対の服従と忠誠を誓っていたのである（静岡はもともと、首府を意味する^{フチユウ}府中という名であった⁸）。

ここまで読まれて、おそらく読者は「新居」から随分話が遠くにそれたとお思いだろうが、それは当たらない。これこそ話の核なのである。時を現在に移しても、状況はほとんど変わっていないのだ。もちろん昔の城は姿を消して面影はまったく残っていないし、当時の大君や家臣もこの世にはいない。しかし城壁や松の木、堀、山、丘、田んぼ、谷あいの土地、それに海も変わらずこの地にある。そして外堀に沿った築堤の角、ちょうど一番高いところに建っているのが、私の「新居」——周囲6、70マイルで唯一の洋館——なのである。我が家は石垣から何フィートか内側にあつて、一部は巨大な松の木陰になっている。正面には富士山をのぞみ、景色という点ではこの地域で最も素晴らしい場所に位置しているのだ。四方の田んぼに波うつ稲はすでに実りのときを迎えて白っぽい色に変わり、やがてこの地に豊作がおとずれる予感を漂わせている。

〔続く〕

⁸ この位置に「コルトンの地図には『府中』として載る」という注が付されている（*Evangelist*紙編集部によるものか）。